
午後のサイレン

不透明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

午後のサイレン

【Nコード】

N7056H

【作者名】

不透明

【あらすじ】

サイレンが鳴りやんだ教室に、残った少女が一人遊びを始める。

大きな音がやんでから、透明なプラスチックの盥に水を張り、上から空の金魚鉢を落としこむ。

ドブンという音をさせ、金魚鉢は一度沈み、水中でひっくり返りながら上がってきた。

開いた口をガパァッと天井に向けて水面に出てくる。

出てきた金魚鉢の口のひらひらに、インキのビンに指をつっこんで赤くしたのもって紅を塗ってやる。

金魚鉢はがはあがはあと言いながらちやぷちやぷ浮かんでいる。

インキがにじんで、しづくをつくり、口から側面へつたっていく。

校長先生は、そういうことをしている私の様子を、初めからじっと眺めていたけれど

何も言わなかった。副校長先生は校長先生の奥さんだ。校長先生のとなりに立って、

濃い色の口を大きく広げて「早く外へ行きなさい。」と叫んだ。

副校長先生の息が上がるのに合せて、口紅がわざとらしく光る。

みんな、とうに外へ避難していた。

赤白帽をかぶった頭が、お行儀よく砂の上で列を作るのを教室の窓から見やる。

避難訓練だったのだ。

私は久馬先生に抱き上げられて、外へ連れて行かれそうになったので、

先生の顔を手ではさんで、それから先生の口にまあるくインキをつけた。

先生のことは嫌いじゃないのに、そういういたずらをして悪く思っただけ、

そのゆびで自分にも、涙袋のあたりから涙をかいた。

インキはずっと赤いのを使っていたので、赤い涙が私の頬の上で

きた。

先生に抱かれたまま、私は赤い涙をたらした顔で、すこし首を傾げてみる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7056h/>

午後のサイレン

2010年10月8日22時06分発行